ふるさとの誇り 8

郷土の武将 土屋惣蔵昌恒

八田地区に武田信虎、信玄、勝頼の三代に仕えた名族金丸・土屋氏の史跡があります。今回は、片手千人斬りで名高い土屋惣蔵昌恒について歴史をひもといてみます。

土屋惣蔵昌恒は金丸筑前守虎義の5男として生まれました。金丸氏は現在南アルプス市徳永にある長盛院の地に館を築き、その周辺を治めていた武田家の重臣で、惣蔵の父虎義は、武田信虎に仕え幼少の信玄の守り役を務めました。惣蔵の兄の平八郎は、信玄から武田家代々に仕えた名門「土屋」姓を与えられ、土屋右衛門尉昌次と名のり、武田二十四将にも数えられる名将でした。

金丸氏館跡 長盛院

惣蔵は13歳の時、初陣の今川勢との戦い（宇津房の戦い）で戦功を挙げ、15歳の時、駿河の武将備前守の養子となり、土屋惣蔵昌恒と名を改めます。信玄の病没後、その家督を継いだ武田勝頼の側近となりました。

群雄割拠の戦国時代、天正3年（1575）勝頼は長篠の戦いで織田・徳川連合軍に破れます。惣蔵はこの戦いで兄昌次と養父貞綱を失い、甲府に帰還した後二人の家禄を相続しました。甲斐市島上条大庭にあったと伝えられる昌次の居館も受け継ぎ、以後そこを自身の館にし、武田家の立て直しに努めた勝頼を支え続けました。

しかし天正10年（1582）1月織田・徳川軍の侵攻が始まると、木曽義昌を皮切りに武田の親族でもあり重臣であった穴山梅雪など主だった家臣が次々に離反、投降します。3月3日、完成したばかりの新府城に火を放ち、郡内小山田信茂の居城岩殿城に向かった勝頼一行は、織田軍に行く手を阻まれ、最後の地として武田家ゆかりの天目山を目指します。一時は甲斐、駿河、信濃を治め、数万の軍勢を誇った武田軍ですが、この時勝頼に従った人数は70人前後とも言われ、その中には女性も多く含まれていました。天正10年3月11日、大和町田野の集落に追いつめられた勝頼一行は最後の決戦を迎えます。惣蔵は勝頼が自害をする時間を稼ぐため、狭い崖の道筋に立ち、左手に蔓、右手に刀を持って押し寄せる敵の大軍を防いだと伝えられています。

土屋惣蔵片手千人斬り跡（甲州市大和町）

これが「土屋惣蔵片手千人斬り」の伝説です。崖下の川は惣蔵に切られた武士たちの血で三日間も朱に染まり、三日血川（みっかちがわ）と呼ばれました。

次々に勝頼から離反していく家臣団の中で、金丸氏の一族は惣蔵を含め、4男金丸助六郎定光、7男秋山源三も天目山で討ち死にしました。最期まで勝頼に付き従い、勝頼を守り抜いた惣蔵の姿は、武田家最後の忠臣として今も後世に語り継がれています。

ちなみに惣蔵の遺児は徳川家康に見いだされ、2代将軍徳川秀忠の小姓となり、後に上総国久留里藩2万石の藩主となっています。

土屋惣蔵の墓（南アルプス市徳永）